

2. 近世の尾太鉾山

特別講演「江戸時代の尾太鉾山について」

長谷川成一（弘前大学人文学部・大学院地域社会研究科教授）

山下先生から、ご懇篤な紹介頂きました長谷川でございます。今日は江戸時代の尾太鉾山と題し、先ほどの桜井さんとは違う観点から江戸時代の尾太鉾山についてお話申し上げます。

本題に入る前に、誤解を生じる可能性がありますので、ここで一点だけお断りしておきます。本日（2004年8月22日）の陸奥新報の朝刊に、今回の記念講演の紹介記事が載りましたが、その中に、長谷川弘大教授が持っている江戸時代に描かれた坑道図とありました。

この図は、私が所蔵しているものではありません。弘前市立図書館の津軽家文書の中にある尾太の絵図や、坑内図のことで、私の所蔵にかかるものではありません。私がこのような資料を持っているということになりますと、大変な誤解を生じますので、この点だけは断っておきます。

それでは、皆様のお手元のレジメの順序に従いましてお話を致します。まず、「はじめに」から。江戸時代における尾太鉾山ほど、江戸時代の鉾山で分らない鉾山はないと、学会や鉾山研究会などでよく言われます。それにはいろいろな理由があります。第1に、従来の弘前藩の藩政史研究の中で、研究者が尾太鉾山に対してほとんど関心を持たなかった。それはなぜかといいますと、弘前藩研究の一つの弱点でもあります。社会経済史の研究が政治史や文化史等に比較して大変弱いということです。なかでも鉾山研究は、今までまったくなされてこなかったといっても過言ではありません。旧『弘前市史』にも、鉾山旧記の「山機録」によった記述が若干なされているのみで、内面に切り込んだ研究はほとんど見当たらない。さらに付言すると、鉾山の研究に関する最大のネックは、鉾山特有の用語が分からない、つまりテクニカルタームが分からないということです。これは林業の研究も同様でして、用語等の問題があつて、

「尾太鉾山を学ぶ～近世



※ 当日配布資料の内容は、長谷川成一「延宝・天和期の陸奥国尾太銀銅山―津軽領御手山の繁栄と衰退―」（弘前大学人文学部『人文社会論叢』（人文科学篇）第12号、2004年8月31日発行）を参照ください。

すんなり入っていけないという問題がありました。

その他、尾太鉾山と比較して、例えば秋田藩の鉾山ですと、皆さんもご承知のように院内、阿仁、八森などの銀山、盛岡藩では尾去沢銅山があり、いずれも有名な鉾山です。尾太鉾山は、それらの鉾山と比較して規模が小さいということがあります。また尾太を除くと、津軽領に目立った鉾山が見当たらなかったという難点もありました。以上のようなことから、弘前藩研究においては、尾太を含めた鉾山研究が進まなかったのです。

しかし近年、地元の三上さんが『陸奥国津軽郡西目屋村のあゆみ』という本を著して、従来とは比較にならないほど尾太や当地域に関する歴史が分かってきました。私もその内容を十分参考にさせて頂きました。以上、尾太鉾山の研究史について、概要をお話致しました。

一の「日本史のなかの鉾山」に入ります。ところで皆さんにお尋ねしますが、江戸時代の日本に坑道が一本のものから佐渡などの巨大鉾山まで、鉾山と称するものがいったいくつあったか、ご存知でしょうか。約 1,000 あったと言われています。その中で、江戸時代中期から後期にかけて、住友泉屋、現在の住友金属の前身ですが、この住友泉屋が調査した結果をまとめた「宝の山」という資料が残っており、それによると、非鉄金属の鉾山は、日本全体で約 350 から 400。非鉄金属とは、読んで字のごとく金、銀、銅、鉛等の金属です。ですから全体の 4 割ほどが非鉄金属の鉾山でした。

次に金、銀、銅の生産量ですが、金の場合、8 世紀半ばに陸奥の国で金が発見されました。この金が東大寺大仏殿の大仏に塗金されました。8 世紀半ばから、16 世紀半ばまでの約 800 年間に、日本で約 100 トンの金の産出があったと言われています。ついで、16 世紀の後半から 17 世紀の初めまでの 50 年間には、800 年間に産出した分の 100 トンが産出しています。800 年間に産出した金を、50 年間で生産したのであり、16 世紀後半は黄金が日本にあふれ返った時代でした。ちょうど信長、秀吉、家康が活躍した時代にあたります。ついで江戸時代の約 270 年間には、佐渡で金が約 41 トン、それから薩摩の山ヶ野金山では約 14 トンの金が産出されたと言われています。日本が、当時の世界の総産金高の約 1.6

パーセントを占めていました。

銀は、15 世紀から 16 世紀にかけて約 1,100 トンが日本国内で産出しました。17 世紀に入って、江戸時代には、6,600 トンの銀が産出しており、世界の総生産の 4 パーセントを占めていたということです。

銅は、戦国時代後期から金銀銅山の開発が進み、元禄 10 年（1697）、日本は世界の産銅国でも首位を占めるようになりました。その時に、長崎から、年間 5,340 トンの銅が輸出されました。中国を含め、東アジア世界に日本の銅が行き渡ることになりました。皆さんもご承知の通り、ベトナムの通貨はドンと言いますが、これは日本から輸出された銅によって、ベトナムの通貨が鋳造されたため、現在でも通貨の単位になったと言います。

近世日本における鉱業生産は、今まで申し上げたような形でも膨大な産額に上り、それに従事する人々もかなりの量に達しました。例えば江戸時代後期、銅山の従事者、つまり銅山で働いていた人は約 20 万人、炭焼は約 10 万人、大坂における南蛮鉸（しば）りの職人が約 1 万人。これは製錬をした銅に鉛を注入して、さらに銀を鉸り取る高等な技術ですが、それに従事する人が約 1 万人いたと言われております。当時の日本が世界のなかでも有数の鉱業国であったことを、以上のことからお分かりいただけたと思います。

皆様のお手元のペーパーの地図をご覧ください。全国の主要な鉱山の分布が①にあります。東北地方、中でも北東北にいかにか鉱山が密集していたか、お分かりいただけるでしょう。弘前藩、秋田藩、それから盛岡藩の藩境地帯、藩の国境地帯にかなり集中して存在します。北東北は、全国的に見ても極めて大きな鉱山の密集地帯です。すなわち北東北の地域は、当時の日本における鉱業生産の主要な担い手でした。その他、佐渡の金山はご承知のように幕府の鉱山ですし、中国・近畿地方の生野の銀山、石見の大森銀山も幕府の直轄鉱山です。先ほど、薩摩の鉱山の話をしてしまいましたが、薩摩と北東北の地域は幕府直属の鉱山ではありません。これらは、各藩領における鉱山です。そのことが、北東北における鉱山の特色とも言えるでしょう。

江戸時代の鉱山には、藩領における鉱山と、幕府直轄の鉱山の 2 種類がありました。しかし幕藩体制の基本的な考え方として、鉱山は全て国家のものです。各大名領主のものではありません。それでは、「この密集している北東北の鉱山は幕府のものなのか?」、「先ほど、藩のものであると言ったではないか」、と反論されるでしょう。基本的な原則として、鉱山は国家のものであり、各地域における藩領の鉱山は、幕府からの預かりものです。鉱山を経営する各藩は幕府に対して、運上金を献上しなければなりません。近世の初期には、かなり厳しく取り立てをします。運上金を取り立てはするけれども、幕府は佐渡な

どの巨大鉱山を持っているので受け取ることをせず、逆に各大名が献上してきた運上金銀を彼らに与えました。その結果、幕府は將軍家の恩恵を各大名に与え、一方の大名たちは將軍家に忠誠心を強く抱くと言う形になりました。したがって、大名が鉱山を隠れて開発することを幕府は最も嫌いました。つまり、幕府の知らないところで、許可を得ない鉱山開発は有り得ないということです。よく言われますけども、隠し鉱山であるとか、そういう話は全国各地に伝承として残っていますが、丹念に資料を読めば伝承の域を出ないものであり、幕府は鉱山の所在を正確に把握していました。把握しているどころか、大名たちは、自分たちの領内から鉱物資源が産出したことを、積極的に幕府に報告さえしています。基本的に幕府は、各藩領における鉱山の経営を認めているわけですので、大名たちが御家取り潰しのリスクを犯してまで、隠れて開発する必要はありませんでした。

二の「尾太鉱山開発以前の津軽領の鉱山」に入ります。レジメのNo. 2をご覧ください。私の著書『弘前藩』（吉川弘文館 2004 年）に書いてありますが、津軽領における一番最初の鉱山はどこかと言われますと、私は「分らない」としか言いようがありません。津軽領の資料に一番最初に出てくる鉱山は、寛永の「日本総絵図」における河原村（後の川原平村か）付近に描かれている金山でしょう。これは恐らく、後の「かはら沢金山」であろうと思います。近年、青森県史の調査によると、津軽領では寛永9年（1632）に領国貨幣、すなわち津軽領でのみ通用する貨幣が発行されています。その貨幣は2種類あり、上銀（じょうぎん）と次銀（なみぎん）です。近年、弘前市内のあるお宅を調査した際に、次銀の記述のある寛永9年の文書が発見されました。それによって、寛永の「日本総絵図」より以前に、領国貨幣を津軽領内で発行していたことが判明しました。領国貨幣は、領内に金山や銀山がなければ発行できません。つまり領国貨幣が発行されていたことは、津軽領内において、すでに領国貨幣として発行、通用可能なほどの、銀の産出量が見込める銀山が存在したことを意味します。ただし次銀を発行した銀山が、どの山かと問われますと、私は自信がありません。しかし我々が考えていた以上に早くから、津軽領においては金銀山の開発が行われていた事実がはっきりしました。

寛文元年（1661）から延宝3年（1675）までの、津軽領における鉱山に関する記事を、弘前藩の藩庁日記の中から抽出したのが、No. 2の年表です。寒沢（さぶさわ）銀山が、1660年代から、弘前藩における鉱山開発の中心になっていることが判明します。しかし寒沢一山だけではなく、④の地図にも見えるように弘前藩では、1660年代に、1～6番まで、領内各地域の鉱山開発のための見立て、すなわち調査を実施しました。調査に赴いた地域は、湯ノ沢川地域、現在の大

鰐や碇ヶ関の山、十三湖付近の尾別（おっぺつ）の地域でした。津軽領内全域における鉱山の開発を目論んで調査隊を派遣して、調査を進めました。④の地図に見えるように、すでに入良川銀山、河原沢金山、虹貝金山の3鉱山は、1645年、幕府へ提出した「正保国絵図」の中に出てきます。各山には、「近年金出申さず候」との記載があつて、入良川、河原沢、虹貝いずれも、現在は産金銀はないのだと、肩書きされています。これは後筆なのか、つまり後で書いたものなのかどうかは分かりません。先ほど申しました、津軽領における当時の領国貨幣の発行状況からしますと、この記述は疑った方がよいと思います。それはともかく、国絵図の中に、3つの金銀山が描かれていることを確認できます。

延宝4年（1676）の「寒沢之内御銀銅山御絵図」に、「かへら沢金山」の記述があり、これは「正保国絵図」に描かれてますし、先述の寛永の「日本総絵図」の中にも出てきます。そのほか図の中で比較的早く見えるのが、左端の方の「さぶ沢銀山」で、これは寛文3年に出てきます。その次が尾太の下方にあります「にごり沢金山」、これは寛文4年に記述が見えます。その他「ひさき銅山」、「はつかう沢鉛山」、「あし沢金山」など、色々な鉱山が出てきます。この絵をご覧頂いて、皆さんもお気づきだと思いますが、尾太山本体には鉱山の記載が見えません。延宝4年の絵図は、尾太山に開発の手が入る直前の絵図だと考えて差し支えないでしょう。このように次第に寒沢から湯ノ沢川沿いの奥深くに、弘前藩の鉱山開発の手が延びて来ました。

三の「**津軽領尾太鉱山の発展と衰退**」に入ります。皆さんのお手元の冊子は、弘前大学人文学部の『人文社会論叢』第12号に掲載した私の論文をコピーしたものです。これを参考にして下さい。

先ほど延宝4年の絵図には、尾太山には開発の手が入っていないと申し上げました。尾太銀銅山が本格的開発されたのは、翌年の延宝5年（1677）5月からです。5月18日の午前7時ころ、尾太の坑内を掘っていた鉱夫が、「大銀之銀筋」、すなわち銀の大鉱脈に切り当てました。6月末には、本銀のところ、鉱脈のことを鉱山用語で鉱（ツル）と呼びますが、最大の銀鉱脈に切り当てました。これから尾太山で銀の大増産が始まりました。尾太は銀山として出発したのです。18世紀の末に菅江真澄が、尾太のことを、「銅掘るところ」（「雪のもろたき」）、つまり「銅山である」と書きました。しかし、尾太の始まりは銅山ではなく銀山でした。

延宝5年から尾太山で銀の出鉱が始まります。私の試算によりますと、尾太で1年間に産出した銀は、約1tから1.2tであろうと考えられます。ただし、これは荒製錬した銀です。尾太から大量に産出した銀を、弘前藩では領国貨幣として発行・通用させ、銀の貨幣に「尾太」という刻印を押し、通称「尾太銀」

として領内に通用させました。尾太から産出した銀は、当時の弘前藩の代表的な領国貨幣として通用しました。

ところで論文に、「尾太鉾山銅吹日記」という資料を紹介しておきました。この「銅吹日記」は、弘前市立図書館に所蔵されているもので、クセのある小さな字で読みずらく、難読資料のため、今まで全部を解読した人はいませんでした。先ほど申しましたように尾太鉾山の研究の遅れの原因は、このようなところにもありました。弘前藩研究の場合、藩庁日記だけではやはり限界があって、更に突っ込んでということになると、「銅吹日記」のような資料を活用しなければなりません。ところが資料は、難読というネックがありました。

さて「銅吹日記」の分析から、貴重な歴史事実が分かってきました。詳しくはお手元の論文を読んで下さい。荒製錬した銅から鉛を注入して、更に銀を鉾り出す技術を、先ほど申したように南蛮鉾りと称します。これは京都の住友泉屋が、ヨーロッパ（南蛮）から慶長年間に得た技術であると言われています。南蛮鉾りがすでに津軽領に入っていたことが、「銅吹日記」によって初めて分かりました。

従来、この技術は、18 世紀後半、北秋田にあります秋田藩の加護山精錬所で、阿仁銅山から産出された銅から銀を抽出するため、南蛮鉾りを導入したと言われて来ました。弘前藩においては、すでに 17 世紀の後半、この技術が大坂から入ってきておりました。弘前大学大学院博士課程の土谷紘子君が、秋田藩の鉾山技術を研究しており、彼女の修士論文によると、秋田藩でも弘前藩と同様、17 世紀後半の延宝年間には南蛮鉾りの技術が入ってきているようだ、とのことでした。すなわち南蛮鉾りの技術は、秋田藩と弘前藩にほぼ同時期に入ってきたということです。弘前藩では、金銀銅惣山奉行の唐牛与右衛門を積極的に大坂・京都へ派遣しました。「銅吹日記」によると、彼は、大坂の銅屋仲間、すなわち南蛮鉾りの技術を持っている技術者集団や、住友泉屋との接触を図っていました。このように、鉾山の開発には、最新の製錬技術が必要であり、北東北にはかなり早い時期に新技術が入ってきていたことが分かってきました。新技術の導入により、尾太山の銀増産が強力に押し進められたことは言うまでもありません。

次に、採鉾に必要な鑿（たがね）などの鉄製鉾具の導入はどうなっていたのか？津軽領は鉄山が少ないところで、弘前藩は幕府巡見使に対し領内に鉄山はないとまで言い切っています。八戸藩の藩日記によると、津軽領の鉄製鉾具は、八戸藩の鉄山（久慈大野）に供給を依存していたようです。尾太の鑿等の鉄材や鉾具は、当時久慈大野の鉄山で生産されていたことで、尾太鉾山の稼行も保証されたと言えるでしょう。

また、尾太には鉾山町が作られ、多くの人たちがやって来ました。先ほど申

しました大坂で抱えた人々（大体 30～40 人ほど）も、毎年鉱山町に来ており、彼らは技術と様々な器材を持ち込みました。人材と器材が導入されたということです。

ところで鉱山には、独自のルール（山法という）があり、山法の適用された例が「銅吹日記」に出て来ます。従って延宝 6 年（1678）あたりには、尾太山にも、佐渡も含めた各地域の巨大鉱山（生野や石見銀山）と同様のルールが適用され、機能するようになっていたことが「銅吹日記」によって分かりました。

しかし、尾太銀山が衰退に向かうのはかなり早い時期です。約 2 年後の延宝 8 年には衰退が始まります。論文の 1 番最後の絵図のページをご覧ください。「尾太御山之御絵図」という資料です。図の右上の方に、スッポン樋（とい）という樋で水を汲み上げている様子が見えます。スッポン樋の樋の長さが約 3m で、10 本ありますから約 30m になります。何段にも分けて湧水を汲み上げている図です。尾太は延宝 8 年の段階で、鉱脈を求めて地底深く掘って行くことにより、水（湧水）に悩まされることになりました。これは日本の鉱山の宿命ですが、湧水によって、幕末維新のころにはほとんどの日本の鉱山が水没していました。このことは日本の鉱山を視察した外国人が、報告書に載せています。日本の鉱山における湧水との戦いは、佐渡でも同じでありますし、尾太でも開発から何年も経たないうちに湧水との戦いが始まりました。寒沢銀山も水との戦いに敗れて、この後、やむなく閉山せざるを得ない状況になりました。このように尾太は銀山としては出銀量も少なくなり、銅・鉛山としての開発に精を出すことになります。

私の著書『弘前藩』の中でも書きましたが、銀山としての尾太、それから銅・鉛山としての尾太と、尾太鉱山は江戸時代に二つのピークを迎えます。1 つめのピークは、今までも申しました通り銀山としてのピークで、17 世紀後半に銀山としてのピークを迎えました。銅・鉛山としてのピークは、18 世紀の前半、享保年間に迎えることになります。享保年間に銅・鉛の産出が多くなり、津軽領から大坂へ廻漕した銅・鉛は、年間約 440 t にのぼりました。当時の山は 2,300 人から 2,400 人の鉱夫を抱えておりました。ということは、純粋に山に関わる人々が 2,300 から 2,400 人となりますと、その家族を含めて約 3 倍、ですから 7,000 人から 8,000 人の人口になります。18 世紀前半から後半にかけての尾太鉱山は、領内で弘前、青森に次ぐ人口規模だったようです。

しかし、銅・鉛山としての尾太も衰退して、19 世紀の初頭には生産額が最盛期の 2.8% にまで衰退する有様でした。幕末に入ると、鉱山の開発よりは銀の再鉸りに移行し、製錬し直す方向に向かいます。技術的にも資金的にも尾太は立ち行かなくなり、まさに近世尾太鉱山の終焉（しゅうえん）でした。

急ぎ足でお話ししましたけれども、最後にひとつだけ。尾太鉾山の労働力ですが、先ほど尾太は水との戦いであるとお話ししました。排水の過酷な労働は、雑役に従事する人々に課せられました。「銅吹日記」に出てくる日雇いの人々、近隣の農村から徴発された人々の使役の過酷さは、言語に絶するものです。例えば江戸幕府の場合、佐渡の金銀山においては、江戸の無宿人を狩り集めて佐渡へ送り、坑内で水替え人足として排水作業に従事させました。これは極めて過酷な労働であったといわれ、安永7年(1778)、江戸幕府は初めて佐渡に無宿人たちを水替え人足として送りました。

江戸幕府に遅れること20年、寛政9年(1797)、弘前藩は尾太山へ囚人を労働力の一環として送りました。懲役刑を課した人間を尾太山や湯之沢鉾山などへ送り、鉾山台所で苦使として働かせました。実際は、坑内に入れて使役したと想定されます。尾太山へ送られた人々が、何度も逃亡事件を引き起こしたことはそれを裏付けています。逃亡者を探索するための費用と人員があまりにも膨大になってしまったため、弘前藩では囚人労働を廃止せざるを得ない事態に至りました。最近の研究では、幕府や尾太鉾山だけが囚人労働を課したのではなく、他の藩でも鉄山で囚人労働を課したという例も報告されています。

予定の時間を15分過ぎてしまいました。これで終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

司 会 長谷川先生どうもありがとうございました。ちょうど予定の時間になりました。難しい内容を非常にやさしく解説して頂いたと思います。尾太鉾山に関する江戸時代から現代までの歴史が、随分見えてきたのではないかと思います。質問の時間は、時間ももう少ないのでとくに取りませんけれども、長谷川先生も桜井君もここにまだしばらくおられますので、ぜひ質問も含めて「こうではないか」、また「こういうこともあります」、あるいは「ここはどうなってる?」ということがありましたら、ぜひ質問等頂ければありがたいと思います。

本日の開催にあたりましては、弘前大学、津軽ダム工事事務所、弘前大学白神研究会に色々ご協力頂きました。とくに津軽ダム工事事務所には、用意も含めて人手をだして頂いたり、パネルも作って頂いたりしまして、本当にありがとうございました。

砂川学習館では、砂子瀬・川原平を中心にして、これらの地域の色々なことについてこれからも学習会を開いていきたいと思っています。鉾山についてもまだまだやってみたいと思いますし、その他にも、こういうことが知りたいなどありましたら、学習館の方にお寄せ頂ければと思います。今日は長い間お付き合い頂きましてありがとうございました。